

「よ、よろしくお願ひします……」

「ふふ、うん。よろしくお願ひします」

顔が熱い。なんとなく緊張して早口になつてしまふ。言いながら頭を下げた私を見て、目の前に立つ暁（あきら）くんがくすくすと笑つた。それで余計に顔が熱くなつていく。

今日は、幼馴染でお兄ちゃんみたいな存在の暁くんのお願いで、彼が個人経営しているエステサロンに来ていた。どうやらこれから新メニューとして出したいマッサージがあるらしく、それを受けて感想を教えてほしいとのこと。たまにバイトで暁くんのお店を手伝うこともあるので、私はそれを二つ返事で了承した。

（だつて……暁くんのお願いだもん……）

頭を上げた私がちらりと暁くんを見上げると、そのかつこいい顔にドキドキしてしまう。

すぐに顔を逸らしたけど、見ていたの、バレてないかな。大丈夫かな。

私の心配を他所に、暁くんは棚からビニールに包まれた施術着を取ると、それを笑顔で手渡してきた。

「じゃあ千佳（ちか）ちゃん、これに着替えて来てもらえる？」

「うんっ」

暁くんの手から施術着を受け取ると、カーテンのかかつた隣の部屋でもらった施術着に着替える。

（……あれ）

暁くんと二人きりなことにちょっと浮かれていて、着替えてから施術着の違和感に気がついた。

この施術着……というか、紙でできたブラとショーツ。ブラはまだしつかりと胸を覆ってくれているけど、ショーツはほとんどTバックだ。前はこんな心許ないのじやなかつたのに……。

「どうかした？」

暁くんの声がカーテンの向こう側から聞こえて、ドキドキしながら振り返る。部屋を仕切るカーテンから顔だけ覗かせて暁くんを見ると、にこにこした暁くんが首を傾げた。

「これ、ちょっと……恥ずかしい、かも……」

笑顔の暁くんを見ちやうと、まるで私だけ意識してゐみたいで恥ずかしい。暁くんは私の言葉に察したような顔をすると、申し訳なさそうに眉を下げた。

「あ、そつか。言つてなかつたよね。オイルマッサージだから普通の施術着だと汚れちやうんだけど……恥ずかしいよね。ごめんね」

「だ、だいじょうぶ！」

謝った暁くんに、思わず首を横に振る。元はと言えば、確認しなかつた私のせいかも。暁くんにそんな顔してほしくなくて、だけどやつぱり恥ずかしくて、胸元を腕で隠しながらカーテンの奥から出た。

暁くんは私がカーテンから出ると、こちらをまじまじと見ていて、その視線に顔から火が出そうになる。

「な、なに……？」

「千佳ちゃん、ちょっと後ろ向ける？」

「えつ……う、うん……」

戸惑いながらも後ろを向く。紙ショーツがTバックのようになつていて、おしりが見えそうなくらいの露出のものだつたから、暁くんにおしりを見せているみたいで恥ずかしい。

そわそわしながら待つていると、暁くんの腕が後ろから回つてきて、紙ブラの下のところに触れた。

「つひ……」

「ごめんね。ねじれちゃつてるから、食い込んで痛くなっちゃつたらかわいそ
うだなと思つて。後ろからなら見えないから恥ずかしくないでしょ？」

そう言いながら紙ブラを整える暁くんに、なるほど：と口をつぐんだ。あり
がたいけど、ちょこちょこ胸に手が当たつて恥ずかしいし、なにより後ろから
抱きしめられてるみたいな格好にドキドキする。

「ん……」

（変な声出しちゃつた……！）

直してくれている最中、紙ブラを少しづらしたことで、紙ブラが胸の先にこ
されて小さな声が漏れてしまう。暁くんは直してくれてるだけなのに…！

声が聞こえていないか、そつと後ろに立つ暁くんの顔を盗み見たら、こちら
を見た暁くんの目と目が合った。

「ん？ なあに？ どうしたの？」

「な、なんでもない…！」

（聞こえてない、かな…？ よかつた……）

首を振つてもう一度前を向くと、今度こそ声が出ないように口をしつかりと
引き結んだ。そのあとも少し整えてもらつたあと、暁くんが「はい、おしま
い」と言つて紙ブラから手を離す。

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして。でも千佳ちゃんのこと後ろから抱きしめてるみたいで、
ちょっとそれしかったな」

「えつ……」

「ほら、こうやつて後ろから腕を回してると、千佳ちゃんがすっぽり納まる」

暁くんの腕が、もう一度後ろから回つてくる。その手が私のお腹あたりに置かれると、あんまり背の高くない私は暁くんの体に包まれる、みたいな感じになつた。

「あ、あの……」

「千佳ちゃんやわらかくていい香り……。肌ももちもちすべすべだね」

肌の感触を確かめるみたいにするする撫でる手にドキドキして、身体中が熱くなる。恥ずかしいけど嬉しくもあつてなにも言えないでいると、暁くんの手がショーツの両端の紐に伸ばされた。

「あ、あきらくん……」

「ん？ こっちもねじれてたから、直してあげる」

「じ、自分で……できるから……」

「大丈夫。やつてあげるよ」

片方の手はお腹に回されたまま、もう片方の手でショーツの紐のねじれを直していく。最初は紐のねじれを直していた暁くんの手が、足の付け根辺りのクロッチ部分に伸ばされた。

「あの、あの……っ」

「ちやんと直さないと。ここ、ちょっとだけ触るね？」

「あ、でも、あの……」

「大丈夫。見てないから」

「で、でも……」

持ち上げるためにクロツチ部分を掴んだ指先が、ちょっとだけ内側に入っている。ちょっとだけとは言つても、そもそも布面積が少ないので。

「ひつう……も、いい……」

「よくないでしょ？ 千佳ちやんのきれいな肌が赤くなっちゃつたら大変だもんね」

「じ、自分で、できるう……」

「できなかつたから、今僕が直してあげてるんだよ？」

ねじれを直すようにショーツを掴んだ指先が、肌に触れるか触れないかの位置で動いていてぞわぞわする。意識したくないのにどうしてもショーツを直す

暁くんの手に意識が集中してしまって、足の付け根の中心が熱を持つように熱くなつていった。

（ど、どうしよう……！）

身を縮こまらせて体を強張らせていないと、ドキドキする心臓の音が暁くんに聞こえてしまいそうな気がする。ぎゅっと目を瞑つて待つて待つて待つて、暁くんの手を余計に意識してしまつて体が溶けてしまいそうだつた。

「……ん、はい。これで直つたよ」

「……つへ……」

「ちやんと大人しく待てて千佳ちやんいい子だね」

にこにこしながらショーツから手を離した暁くんに、なんだか拍子抜けしてしまう。そんな私の顔を見た暁くんは、くすくす笑つた。

「ふふ。千佳ちゃん顔真っ赤。ドキドキしちやつた？」

「だ、だつてえ……」

「かわい。千佳ちゃんの大事なところ、触られちやうかと思つたもんね？」

「ちつ、ちが……」

「うんうん、それじゃあ始めようね？」

からかうようにくすくす笑う暁くんは、私の手を取つて施術台まで案内した。完全に暁くんのペースで恥ずかしい。恥ずかしさに赤くなつた顔を見られないようすに顔を俯けながら、大人しく暁くんに手を引かれると、施術台の前に立つ。そのまま仰向けに寝かせられると、目元にタオルがそつと掛けられた。「これから温めたアロマオイルでマッサージしていくから、痛かつたりしたら教えてね」

暁くんの言葉に頷く。目を瞑ると、アロマオイルのいい香りがした。肩の辺りから優しくマッサージが始まつていく。最初は恥ずかしいと思つてたけど、気持ちよくて寝ちゃいそう……。うとうとしながら施術を受けていると、だんだんマッサージする手が下に降りてくる。

「……ん……」

そして、ついそんな声が出てしまつた。

鎖骨辺りを押す親指とは別に、かすかに胸の先が刺激される。手のひらを広げていて、その指が当たつたのかもしれない。

リラックスしていたこともあって、声が出てしまったことに顔が熱くなる。

「気持ちいい？　もう少し続けよっか」

「……あ……♡」

ぐりぐりと押される親指といつしょに、広げた小指が胸の先端をさわさわ刺激した。いつもよりも薄い生地は、それくらいの刺激でも簡単に拾ってしまう。

（どうしよう。暁くんはただマッサージしてくれるだけなのに、変な気分になっちゃう…♡）

さわさわ……♡

触れるか触れないかくらいのそれに、焦らされているような気分になつて、思わず身じろぎする。

「あ、ごめんね。痛かった？」

「ん、んーん！」

「そう？　痛かつたら言つてね」

「うん…っ」

「じゃあ次は、脇のマッサージしようね」

暁くんはそう言うと、脇へと手を伸ばした。それにちょっとだけ安心……と、ほんのちょっとだけ残念なような気持ちが胸に広がる。

（な、なに考へてるんだろう私……暁くんはマッサージしてくれてるだけなのに……！　変な格好で、いっぱい触られてるから、なんだかえっちな気持ちになっちゃう……）

今度こそ気にしないように、タオルの下でぎゅっと目を瞑る。

肩の辺りから温かいオイルが垂らされて、体の両側にぴたりと揃えていた腕を少し広げられる。そして暁くんの4本指が円を描くように脇をマッサージする……んだけど。

「…つ……♡」

手のひら全体を肌にぴったりつけているから、まるで胸を揉まれているような感覚になる。さつきの刺激でわずかに反応している先端の突起に、手首が押し当たられて熱い息が漏れた。オイルで紙ブラが濡れてしまって、その分暁くんの手を余計に近く感じる。

「ふふ。硬くなっちゃったね」

「え……？ あつ……♡」

暁くんの小さな声がうまく聞き取れなくて聞き返すけど、骨張った暁くんの手首が硬くなつた乳首に刺激を与えて声が漏れてしまふ。恥ずかしくて思わず手で口を押さえると、暁くんが優しくその手を外した。

「だめ。声我慢しないで……？」

「あ♡ でも……んう♡ はずかし……あつ♡」

「千佳ちゃんの恥ずかしい声聞きたいな」

「つひ……♡」

暁くんの指が紙ブラの上から勃起した乳首を弾くと、びくりと体が飛び跳ねる。ずっとむずむずしていたところを触つてもらえて、甘い刺激に頭が痺れた。

「あきら、く……ん♡ そこお、マッサー、ジ……あ♡ じや、ない……♡」

「マッサージだよ？ しこりがあるから、しつかり解そうね」「で、でもお……♡ あ♡」

（ずっと触つてほしくてむずむずしてたから、乳首カリカリされるの気持ちいい……♡ これ、マッサージなのかな？ わかんなくなつてきちゃつたけど、暁くんがマッサージつて言うからそうなのかも……）

濡れた紙ブラの上から乳首をカリカリしたり弾いたり、暁くんの指から与えられる刺激に声が漏れる。濡れた紙ブラは暁くんの指を近くに感じるけど、だんだんそれだけじや物足りなくなつてきて、足の間をすりすりし始めたときだつた。

「これ、もう外しちゃうね」

「あ……♡」

暁くんが紙ブラの端を破つて、おっぱいが露わになる。反射的に隠そうと胸に腕を伸ばしたら、暁くんの手が私の手首を掴んで気をつけの体勢に戻した。

「だーめ。千佳ちゃんのかわいいおっぱい、見せて？」

「んう……はず、かし……あつ♡」

カリカリカリ♡

身を捩る私の勃起した乳首を、直接爪の先で甘く引っかかれる。

「ふふ。千佳ちゃんの乳首、こんなに硬くなっちゃった……カリカリ気持ちいいね」

「つ……あ……つ♡ それ、ダメ……え♡」

「うん、だめだからちゃんと解してあげようね。くにくにしたら治るかな?」

「や……つ♡ あ、ん♡ あ、あ……♡」

くにくにと乳首を摘まれて、形を変えるように弄ばれる。そのたびにびりびりと甘い痺れが襲ってきて、快感に腰が動いてしまう。

動いた拍子に目元のタオルがずり落ちて、暗かった視界が明るくなつた。明るくなつた視界の先にいた、施術台の隣に立つてゐる暁くんと目が合う。

「あ、ほら。千佳ちゃんが暴れるからタオル落ちちゃつた」

「ご、ごめ……、ん♡ あ……ごめつん、なき……いい♡」

かつこいい顔と目が合つて、暁くんはしつかりと服を着てゐるのに私だけおっぱいを曝け出していく、恥ずかしい声を出していて、反射的に謝つてしまふ。

（うう……暁くんかっこいい……こんなかっこいい人におっぱい見せて、乳首カリカリされて、わたし、気持ちよくなつちやつてる……♡）

「くくつ、うう♡ あ、あ……いつ♡ くくつ……♡♡」

そう思つたら今度はびくびくつと体が震えて、頭が真っ白になつた。突然訪れた激しい快感に驚いて、はつ、はつ、と犬みたいに息が漏れる。

「なあにそれ……？ 謝つたらイッちやつたの？ それとも……僕の顔見たから？」

快感の余韻が続いたままほんやりとする頭の上で、暁くんの声が聞こえた。気持ちよすぎてよくわからなくなつてきたけれど、暁くんの声が嬉しそうにも聞こえたから、顔を見たくて見上げたときだつた。

「ほんと……かわいいね」

「えつ……あつ♡ ああ♡」

暁くんの手が足の付け根に向かつて伸びて、紙ショーツの上から突起に優しく触れる。指で優しくすりすり♡ とこすられて、体がびくついてしまう。「かわいい千佳ちゃんのために、こつちもマッサージしてあげようね」

「つひ♡ あ、ダメつ♡ そこ……ダメえ♡」

熱くなっていたそこをカリカリッと爪で引っかくように触られるたび、腰がびくびくと動く。さつきよりも強い快感が襲ってきて、体に力が入らなくなつていく。

「あつ♡ ゆびい……とめつ、んつ♡」

「止めてほしいの？ でも千佳ちゃんのここ、こんなに触つてほしそうに勃つてるよ。爪でカリカリされるの気持ちいね」

「つうう♡ あ……つ♡ き、もちい……♡」

「ん、気持ちいの言えてえらいね。かわい」

暁くんはそう言うと、私のおでこにちゅっと唇をくつつけた。それに一瞬驚いたけど、その間も指の動きは止まらなくて、すぐに意識がクリトリスに集中してしまう。

「はつ、ん♡ んつ♡ あつ……う……あ、あ♡」

「千佳ちゃんかわいいよ。ふふ、どんどん濡れときちやうね。これ好きなの？」

「んつ♡ す、き…♡ あきらく…すきい♡」

「つ…僕も好き…」

珍しく驚いたような顔をすると、暁くんは今度は私の唇に口付けた。気持ちよさを逃すように空いていた私の唇の向こう側から、暁くんの舌が入つてくる。それは私の舌と絡めるように口の中で動いていたから、私も答えるように暁くんの舌を絡め返した。その間もクリトリスへの刺激はずつと続いていて、暁くんのやわらかい舌が苦しいのに気持ちよくて、快感以外のことがどんどんなにもわからなくなっていく。

「つん…♡ はあ…つ、あ♡ あきらくん…すきつ♡ あつ…すきい♡」

♡」

「もう…どうしてそんなかわいいの…？ 言うつもりなかつたのに…我慢できなくなるよ」

「あつ♡ んう…、ああ♡」

「ショーツもぐしょぐしょ…。これもう意味ないから取つちやおうね」

暁くんがクリトリスを触っているのとは反対の手で私の頭を優しく撫でると、するつとショーツを脱がした。ぬるりとした感触がして見てみると、おまんことショーツの間に糸が引いていた。

「すごいね、千佳ちゃん。糸引いてるよ。そんなに気持ちよかつた？」

「あ♡ きもちい……気持ちい、よお……♡」

「そう？ じやあもつともつと気持ちよくなろうね」

「えつ……あ、ああつ♡」

暁くんが私の横から離れたと思ったら、今度は足の間にあたたかくてやわらかい感触がした。

「あつ、だあ♡ だ、め……♡ はつ♡ なめつ、ちや、だめえ……♡」

「ん、どうして……だめなの？ 千佳ちゃんのクリ、んむ……ピクピクして、すごいえつちだよ」

喋りながら暁くんの舌がクリトリスを舐める。指とはまた違う、あたたかくてやわらかくて、でも少しがらぎらした舌の感触に、身を捩って快感を逃さないとおかしくなつてしまいそうだつた。

「や、やあ……♥ も、……あ♥ だ、ダメえ……～～つ♥ あつ、き、きも
ち……よくつ……なつちや、う、からあ……♥♥ ～～～♥」

「ふふ……かわい、千佳ちゃん。は……ん……もつと……ん……ひもちよく
なつて……？」

やわらかい舌で撫でるようにれろれろ♥ と舐めたと思うと、今度はさきつ
ぽを固くして、ちらちら♥ と弾くようにクリトリスを刺激する。

「ひつ♥ ああつ……だ、ダメ……んつ……それ、ダメ……さきつぽ……あ
♥ ちらちらす、の……つ……は、♥ だ、めえ……んう……あ……～～～

♥♥

「んむ……すごいいっぱい……千佳ちゃんの、えつちなお汁で……こ……
ん、とろとろだね……」

れろれろれろ♥ ぢゅるるるる……♥

「あ、あつ♥ は、はず……かし……つ♥ ぶつ♥ あ♥ だめつ♥ すつ
ちや、ダメ……つ♥ ああ♥」

「ふふ……ちろちろも、ん……吸うのも……だめだめって……千佳ちゃん……きもちよく……なつひやうもんね……ん……」

「ひつ、んあつ♡ ～～～つ♡」

舌で突起を押し潰したり吸つたり、先を固くした舌で弾くように舐めたり、いろいろな刺激でクリトリスを責め立てられてぱちぱちと頭に火花が散つているような感覚になる。

「んつ、あ、だめ♡ あ、あつ♡」

「千佳ちゃん……気持ちよくて、ん……いやいやしちゃうね……ほんとかわいい……ふふ、ここ……ひもちいとこ……いっぱいなめなめしてあげるね……？」

くちゅくちゅくちゅ♡

ちろちろ♡ ぢゅるるるるつ♡

「はつ、あつ……!? ん、ううつ♡ だ、め……またイっちゃ……、あつ♡

だめつ、イっちゃ……あつ……～～～つ……!!」

先ほどよりも大きく腰が跳ねて、またイつてしまふ。快感の余韻に浸るようにな、瞼がうつとりと落ちていく中で、暁くんの声が意識の遠くから聞こえた。

「千佳ちゃんいっぱいイけてえらかったね、だいすきだよ……」